

浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

第 124 回 (2019. 8. 6) の要旨

拝読文(『真宗聖典』69～70頁)

ある時は室家・知識・郷党・市里・愚民・野人、転た共に事に従いて更に相利害す。忿り怨結と成り、あるに富みて慳惜す。肯て施与せず。愛宝貪重にして、心勞し身苦しくす。かくのごとくして竟りに至りて恃怙するところなし。独り来り独り去りて、一も随う者なけん。善悪・禍福、命を追いて生ずるところなり。あるいは楽処にあり、あるいは苦毒に入る。然るに後に乃し悔ゆとも当にまた何ぞ及ぶべき。世間の人民、心愚かにして智少し。善を見ては憎謗し、慕い及ぶことを思わず。但し悪を為さんと欲うて妄りに非法を作す。常に盜心を懷きて他の利を悋望す。消散し糜尽してまた求索す。邪心にして正しからず。人の色ることあるを懼る。予め思い計らず。事至りて乃し悔ゆ。今世に現に王法の牢獄あり。罪に随いて趣向してその殃罰を受く。その前世に道德を信ぜず、善本を修せざるに因りて今また悪を為れば、天神剋識してその名籍を別つ。寿終わり神逝きて悪道に下り入る。かるがゆえに自然の三塗無量の苦惱あり。その中に展転して世世累劫に出ずる期あることなし。解脱を得難し。痛み言うべからず。これを二つの大悪、二つの痛、二つの焼とす。勤苦かくのごとし。たとえば大火の、人の身を焚焼するがごとし。人、能く中にして心を一つにし意を制し、身を端しくし行を正しくして、独りもろもろの善を作りて衆悪を為らざれば、身独り度脱して、その福德、度世・上天・泥洹の道を獲。これを二つの大善とするなり。

「ある時は室家・知識・郷党・市里・愚民・野人、転た共に事に従いて更に相利害す」。これはやはり、この第二の悪の一番初めにあった「義理なくして法度に順ぜず」、義理の関係をちゃんと作っていないということがそもそも問題であったわけで、だから人間が生きているということは容易なことではないと思うのです。人間として人間関係を本当に作っていくことなしに、独善的な形で生きれば必ず仕返しがかかる。そういう関係で生きていけば、事に従って、互いに利を求めて害し合うのだと。「利害」というのは、利というのは自分が利益を得る。害は相手害する。そうすると今度は逆に自分が害せられ、相手が利する。互いに利害する。こういうことが起こってくるのだと。

その次に「忿り怨結と成り」、「忿成怨結」という言葉です。これは親鸞聖人がこの言葉をお取りになって『教行信証』の後序のところで出てきます。法然上人の教団が弾圧されるわけですが、『聖典』398頁の後序が始まってから4行目のところに「ここをもって興福寺の学徒」と、「太上天皇諱尊成、今上諱為仁、聖暦・承元丁(ひのと)の卯の歳、仲春上旬の候に奏達す」、「仲春」、春の半ばということですが、昔の暦では、一、二、三月が春ですから、仲春というのは二月、「上旬」ですから十日までの間に奏達があったと。そういうふうな下の者から上の者へと話が持っていかれて、「主上臣下、法に背き義に違し、忿(いかり)を成し怨(うらみ)を結ぶ」と。この「主上臣下」という言葉は、『無量寿経』のこの二つめの悪のところ、『聖典』の68頁の真ん中あたりに「主上不明 任用臣下」と、主上、臣下という言葉がここにあります。そして後序では「法に背き義に違し」と、法に背き、そして「義理」という言葉で言われてきた、その「義に違し」と言っています。道理というものがあるのをはつきりと知らない。そして「忿を成し怨を結ぶ」と、第二悪のところから言葉を取っておられる。

これは、法然上人の教団に法難が起こった。貞慶という興福寺の高僧、天皇家にも出入りす

るような力を持った学問のある僧侶が、法然上人の教えの本質、教えの道理を知らずに、だから義に違し、法に背いて、そして忿の心を主上に向けて、天皇に向かって奏達する。そういう形をとって、どうか弾圧をしてくださいと言わんばかりの物言い、そういうことをしてしまっているということを、親鸞聖人は、『無量寿経』に照らして、この事件が起こってくるいわれはどこにあるかという時に、それを『無量寿経』の教えのこの第二悪の問題が、現に今、歴史上、ここに起こってきているのだと。そう押さえておられるのだと思うのです。だから忿と、そして怨という言葉、こういう問題はなかなか根が深いわけですが、お互いにそういう関係を起こしてくる場合に、義理がない、本当の道理を知らないのだということからきているのだということを知らされるわけです。

「愛宝貪重にして、心勞し身苦しくす」。宝を愛し貪りが重くなる。そして心も身もそれにはせ使われるわけです。持った物によって物に対する愛着が生きている身心を苦しめてくるわけです。そういうことが起こるのです。不思議なことだなと思うのですが。私の友人に、同じように教えを聞いて、富山の方の住職になった人がいて、それがお父さんの影響もあって民芸に凝って民芸品を集め出した。民芸品を集めるだけでなく民芸品を売る商売も始めて、お寺なのだけれどその一面に売店を設けて、そこで自然の草等の繊維を織って織物にするという技術を民芸としてやって、それで出来たネクタイとか輪袈裟とか帯とか、そういうものを作って売った。それが結構売れて、儲かるから益々それで民芸を買い集める。民芸の中でも立派な良い物を集める。集め出すときりが無い。それで美術館を作った。そうしたら泥棒に入られて大切にしていたものがごっそりやられた。それで彼は、さすがに仏教徒だなと思って感心したのですが、これはどういうふうにかえたらよいかというと、自分のところに民芸品はたまたま縁があって来てくれていたのだと。だから縁がなくなったのだと。こう思うしかない、と言って諦めていました。そうは言うものの、辛かろうなど。やはり愛宝貪重ですから。それが何年か経って盗人がばれて、盗人も盗んでいったけれど売りに売れないわけです。有名な物で足が着いてしまうから。それで自分でためこんで自分で愛着したのだね。結局、最後は彼のところに戻りましたけれども。そんなことがあったのです。

「かくのごとくして竟りに至りて恃怙するところなし」。この場合の「恃怙」は、恃も怙もたのむという字です。この場合のたのむは、本当に依り処（どころ）とするたのみ方とは違いたのみ方を表わそうとする文字のようです。時間的にずっとたのむようなことではないようなものを、一応、依り処にする、たのみとする。その場合、本当にたのむということになってないのだけれど、そういうたのむことすらできない。

依り処というと、曇鸞大師が解釈の中で出しているのですが、我々の価値観では、いろんな罪を犯したりしているものを、たった一度の念仏ぐらいで消せるはずがないと。罪の深さが感じられれば感じられるほど、念仏一回称えたら消えるなどと、そのようなはずがないと思ってしまう。人間の妄念の中で、犯す罪の重さと念仏の重さを比べて、念仏を妄念の中で称えているのであったら重さがないから、とても犯罪の重さにはかなわない。そういう比喻を出して、それは依り処が妄念でしかない。人間の考え方が妄念に立っている。仏陀の覚りの智慧からすれば妄念でしかないような知恵を根拠に生きてしまっている。今のここで言う義理がない形で生きてしまっている。独善的に自分が正しいと思って生きてしまっている。そういう秤で計っているのが我々人間の人生の目盛りであると。

それに対して念仏はどこから来るかと言ったら、如来の大悲が本当に苦悩の衆生を救い取らんがために案じ出した名号という方法、この名号の方法を受け止めてそれを行ずるという場合には、依り処が変わるのだと。妄念の立場から如来の大悲の智慧の立場を依り処にすることによって重みがまったく変わるのだと。こういう譬喩で曇鸞大師は教えておられます。つまり依

り処が変わるということが価値の転換という意味をもたらすことになるのです。我々は妄念で、愛着の心で、重いか軽いか、正しいとか間違っているとかという判断をし続けてきているけれど、その延長上で念仏を考えるのは間違いなのだ。念仏の立場は如来の大悲の立場だと。これを本当に受け止めるか受け止めないか、依り処に取るか取らないかという問題は、今度は人間の信の問題、信ずるという問題なのです。それなしに行じたのでは妄念でしかない。妄念の延長上で秤を計っているのではないのだ。依り処が変わるということを言っているのだと曇鸞大師は教えてくださっています。そういう意味で、本当の依り処という問題を、人間はどこかでしっかりと考えなければならない。

蓮如上人のお書きになった御文に「白骨の御文」というのがありますけれど、人間の人生ははかない、百年ともたないのだと言われた後で、亡くなってしまえば白骨になるのだぞと。だから後生の一大事とたのめと、こう言うのです。そこで論理転換が激しいので、我々が拝読していても、どうしてそういうふうになるのかよく分からないという説得の仕方なのですが、情念として、はかないのだぞと教えておいて、だから依り処をしっかりと立てなさいということを行っているのです。それを後生の一大事と言うから、何か後生というのがあるのかなとか、現代の生活からすると何のためにそういうことを教えるのかがよく分からない。でも、あれは本当の依り処をしっかりと、はっきりとさせなさいということを行っているのです。そういうことを思うのです。

「独り来り独り去りて、一も随う者なけん」、「独来独去無一随者」、ここにはっきりと、自分中心主義で、人間関係にあるべき道理を知らないで生きているということは、結局、独来独去なのだと言われています。孤独は間違っているとか、孤独は寂しいからいけないのだとかということについて、孤独のもっている大切な意味もあるのだと言われますけれど、ここで言う「独」は、自分さえよければいいという形で自分中心主義で生きていることがもたらしてくる独ですから、本当に信頼すべきものがないという孤独感です。

自分自身が自分として独立する、これは仏陀自身が、独りで生きるのだよということを一面で教えているわけです。ただその場合には、自分さえよければいいという意味ではなくて、独り立ちして自分の足で生きていく。しかし、そこには、必ず人々と共にということが付いてくるわけです。人々と共に生きながら、自分自身が自分で生きていくということをしっかりと歩むという形で教えている。

これはある意味で矛盾すると言えば矛盾するのですが、矛盾するのではなくて、間柄がありながら独立者であるという、こういう問題が人間という問題なのです。人間であるということは、自分さえよければいいということが人間なのではなくて、たまわった命が間柄に置かれてあるということをしっかりと認識して、自分が自分として生きるということと、人も人として生きているのだということとを、しっかりと両立させて生きることが大切だということなのです。これが本当に教えられてあるのが仏教だと私は思っております。それが成り立たないのが独善主義です。独善主義的な独立独歩は、結局、孤独に陥るわけです。そういう独の面が近代には強いのですが、それは間違っているのだと思うのです。だから随う者はないと言われる。

「善を見ては憎謗し、慕い及ぶことを思わず。但し悪を為さんと欲うて妄りに非法を作す」。善を見ると憎んで謗る。そういう心が人間には一面にあるのです。引きずり下ろすと言うか、足を引っ張ると言うか。善いことがあるならその善を学んでいこうとせずに、それを敵の如くに憎んでしまう。悪を為そうと思って、みだりに非法、道理ではないようなことをしてしまう。この言葉を読むと私は親友で早くに亡くなった男がつぶやいた言葉を思い出すのです。彼は「どういうわけか人間というのは悪いことが好きなんだよな」と言っていました。とにかく

彼は博打が好きで、麻雀でも競馬でもそういうことが大好きでした。そういうことばかりやっているのだけれど、でもそれが悪いということは知っているのです。知っているのだけれどもどうしてもしてしまふ。だから人間というものは悪いと知っていて悪いことをしたくなるのだと、こういうことをぼやくように言っていた言葉が思い出されるのです。

「常に盗心を懐きて他の利を恚望す」。他の人間が利を得ていることを恚望する、うらやましいと思うわけです。「盗心を懐く」というのは、自分が盗みたいと思っているわけではないけれど、何か、できればあやかりたいと、そういうふうにながれたいと、そういうことを言っているのでしょう。

「消散し糜尽してまた求索す」。そういうことをしても結局、消散し糜尽す。私の友人の場合もたまたま馬券が当たったのだと言って、これで止めたいのだけれど止められないのだと。結局、何のことはない、全部はたいてなげなしたのですけれど。消散するのです。「糜尽してまた求索す」、また欲しくなるのだと。当に本当にそういうことになると思います。

それは「邪心にして正しからず」。正しくないことが分かっているけれど正しくない方に心が動いていってしまう。そういうのが人間なのです。正しいというのは、やはり義理という、そういう方向に向かないことを「邪心」という言葉で言うのでしょ。う。「邪」というのは、「よこしま」と日本語で読むわけですが、つまり縦にいかないで横にいってしまう。そういう心だから、まっすぐにならない。正しくない。

「天神剋識してその名籍を別つ」。「神」はたましい、心、精神と、いろんな意味があるのですが、日本語で言う神様という意味ももちろんある。「天神」は天にあるそういう見えざる力をもった何かです。中国の文化には天地人という言葉があって、天は人間の上にあって人間を見ているもの、地は人間を支えているもの、そこに人間は命が与えられている。天という言葉で、天の意志と言いますか、何かそのようなことを人間は感ずるものだから、それが言葉となって天神となっているわけです。天神は「剋識」する、この「剋」は、きざむという字です。人間が知られまいとして悪をやってしまったたりしている場合、天がちゃんと見ていて、きざむというのは、木にきざんだり、石にきざんだりして、「忘れないぞ」と。

「寿終わり神逝きて悪道に下り入る。かるがゆえに自然の三塗無量の苦惱あり」。命が終わって神（たましい）もこの世から他の世界にいってしまう。この「逝く」というのは、逝去の逝ですから、亡くなることを表わすのですけれども、人間が亡くなるということはどういうことかということ、古今東西、ずっと人間は考えずにおられないから考えてきていて、そしていまだに考えているわけです。どこにいくかは本当は分からない。けれど、どこかにいっているのだらうと思うわけです。思いたいわけです。それで、邪心にして正しからぬ場合には、結局「悪道に下り入る」。「悪道」というのは、地獄・餓鬼・畜生と言われている三悪道、善い状態にはいかないのだと。こういうふうに見えるわけです。

「その中に展転して世世累劫に出ずる期あることなし。解脱を得難し。痛み言うべからず」。結局、命が終わった後はどうなるかと言ってみても、命が終わった後も、入れ替わり立ち替わり、悪の結果の禍というものが、次から次から起こってきて、出るような時がない。その苦悩から出ることもできないし、そこから本当に解放されることはない。独善的に自分中心の考えで生きればそれでよいと思っているけれど、そのことが引いてくる自分の孤独感が終わる時はない。

「これを二つの大悪、二つの痛、二つの焼とす」。悪が痛を呼び焼となる、こういう因果関係。そういう形で、時の中に過去、現在、未来があると同時に、現在は未来の中に終わらない時を感ずる。こういうことが教えとなって言われてくるわけです。

編集担当：越部良一（親鸞仏教センター嘱託研究員）